Pascher, Geitler, Fott など，かつて錚々たる藻類分類学者を輩出した中央ヨーロッパのチェコやオーストリアは現在も藻類の研究が盛んである．本書は両国を代表する藻類研究者二人による労作である．これまで全世界で記録された藍藻類（藍色細菌）を除く土壌藻，気生藻，地衣共生藻のほとんどすべての属・種が収録され，その数は170属，およそ1,000種に及ぶ．それぞれの綱，目，科，属，種についての検索があり，確かな種のすべてについてパッシャーばりの克明な図が添えられているのでドイツ語に親しみの少ない人にも理解しやすい．土壌藻や気生藻には単細胞や群体性のものが多く，培養して調べるなど手間がかかるせいもあって，研究は充分でなく，水生藻に比べてわかっていることが少ない．これまでにこの分野の藻の分類を纏めた本がなかっただけに，本書の刊行は実に有難い．なお，本書の著者の一人で，1,000頁を越すクラミドモナス属のモノグラフ（1976）や800余頁に及ぶ中央ヨーロッパの鞭毛性緑藻類のフロラ（1983）の研究などで知られるEttl博士は1997年2月に永眠された．享年65才であった．ご冥福を祈りたい．（千原光雄）

□呉　永華：**被遺忘的日籍台湾植物学者** 474 pp. 1997. 350元．

戦前に台湾で資料の収集や研究に活躍した，日本の植物学者12名の経歴，業績，本人の紀行文，著述目録，本人を紹介した文献などを詳細に記述したものである．牧野富太郎，大渡忠太郎，内山富次郎，田代安定，早田文蔵，川上瀧彌，島田彌市，佐々木舜一，金平亮三，山本由松，工藤祐舜，正宗厳敬の諸氏が述べられている．このような本が台湾で出版されたことは驚きであると共に，日本では殆ど忘れられている人達も収録されていて，日本の研究者にとっても感謝すべきことである．台湾の植物学史の中でも，精力的に研究が行われた日本の占領時期の50年は無視できないものであるとして試みられたものである．内容からみると突っ込みの足りない点もあるけれど，日本から離れた台湾ではやむをえないことであろう．日本の生物史にとっても貴重な文献となろう．同じ著者による日本の動物学者の伝記も出版されている．東京の亜東書店で扱っており，￥2800である．

（山崎　敬）

□Nikolov H.: **Dictionary of Plant Names in Latin, German, English and French** 926pp. 1997. Gebruder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Stuttgart. DM 188. 00.

本書は，タイトルどおり植物名の辞書である．前半はアルファベット順に属名と科名がならべられ，属名についてはその属が分類される科名が示され，代表的な1種があげられている．属名や種名にドイツ語，英語，およびフランス語の名がある場合はそれらが記載されている．たとえばメギ科の Berberis では，Berberis → Berberidaceae，Berberitz（ドイツ語），Barberry（英語名），Vinettier（フランス語名）となり，代表種として *Berberis vulgaris* があげられ，この種のドイツ語名，英語名，フランス語名も書かれている．本書では14,500以上の属があげられている．特に熱帯の植物については多くの属や科をひろっている．しかし，植物分類学上記載されいてるほとんどすべての属や科をあつかっているわけではない．従って，属名がわかってその科名を知りたいときや，科の特徴，分布，属数，種数等分類学的情報を得たいときには，本書では役にたたず，Willis の A Dictionary of Flowering Plants and Ferns (1973) や，R. K. Brummitt の Vascular Plant Families and Genera (1992) ような文献にあたらなければならない．本書は学名がわかった植物について，そのドイツ語名，英語名，フランス語名を知りたいときに役にたつものである．本書の後半は逆に植物のドイツ語名，英語名，フランス語名をアルファベット順にならべ，それに対応する学名が示されている．ドイツ語，英語，フランス語の本を読んでいるとき植物が登場した場合，その学名を調べることができる．ドイツ語，英語，フランス語ではぴんとこない名前でも学名になればどんな植物かイメージできるというわけである．もちろんいろいろな植物をよく知っている必要があるが．

（寺林　進）